

集合か構造か

——命題の正体にかんする二つの立場——

大川祐矢*

1. はじめに

フレーゲ、ラッセル、ウィトゲンシュタインにまで遡ることの出来る言語哲学の歴史において、ある一つ概念が常に重要な役割を果たしてきた。「命題 (proposition)」である。命題が果たすべき役割については諸説あるが、大雑把には次の三つに分けられよう。(i) 真理値の担い手、(ii) 命題的態度の対象、(iii) 文 (特に叙述文) の意味の三つである。加えて、「雪は白い」と「Snow is white」が言語表現としては区別されるものでありながら意味としては同一であるということから、命題は本質的に言語から独立したものと考えられる。

では、この命題なるものの正体とは一体何なのだろうか。実は、この点については未だ統一的な見解が存在しない。本稿ではそうした事情を踏まえて、こうした命題の正体にかんする二つの主要な立場、すなわち命題を可能世界の集合と見なす立場 (**可能世界説**) と命題をなんらかの構造と見なす立場 (**構造説**) について検討する。後者は前者が孕むある問題点を解決すべく提案された (あるいは再興した) ものであり、現在においてより有力な立場とされている。しかしながら本稿で見るように、構造説は必ずしも手放して受け入れられるものではない。事実それは可能世界説が持ちえなかった問題点をいくつも孕んでおり、また可能世界説が孕んでいた当初の問題は可能世界説をなんらかの仕方でも改訂することで解決されうるのである。

以下、第二節において可能世界説の概要と問題点を提示し、続く第三節においてそれらを解決すべく提案された構造説の概要を示す。その際そうした構造説が孕むいくつかの問題点を確認し、それらを踏まえて提示された構造説の改訂案を見る。加えて、そうした改訂版構造説においても問題があることを示す。その後、第四節において当初の問題点を回避出来るように可能世界説を改訂する可能性について検討する。第五節は全体のまとめである。

2. 命題の可能世界説

2.1 概要

命題を可能世界から真理値への関数、あるいはそれが真となる可能世界の集合として定義する考え方は、特に内包的な形式意味論において主流の考え方であり、その

最初期の試みは Montague(1973) や Lewis(1973) において見ることが出来る⁽¹⁾。また、Stalnaker(1984) においては、可能世界を命題に還元する立場にたいして、可能世界説を哲学的に擁護する試みが行われている。

可能世界説において、命題とその関連概念は次のように集合論的な用語を用いて定義される。すなわち、たとえば命題 p が w_1 および w_2 のみで真であるとされるとき、命題 p は集合 $\{w_1, w_2\}$ であるとされる。また真理については、命題 p がある世界 w で真であるのは、 w が p の要素である場合かつそのときに限られる、という形で定義される。さらに論理的含意関係については、命題 p が命題 q を論理的に含意しているのは、 p が q の部分集合であるときかつそのときに限る、という仕方で定義される。こうして、命題を可能世界の集合と見なすことによって、命題が担うとされる論理的性質は集合論的な用語によって書き換えられることになる。

2.2 問題点

しかしこのようにして命題を可能世界の集合と同一視する立場にはある問題が付随することが良く知られている。というのも、可能世界説は、全く同じ可能世界において真となる二つの命題があったとき、それらが同一の命題となるという帰結を導くからだ。これは集合論の外延性公理から帰結する。すなわち、全く同じ可能世界で真となる命題は、同一の要素を持つ集合と見なされることになり、結果、集合としても同一であるとみなされることになる訳だ。また、同一の命題であるならば、それらは常に置き換え可能でなければならない。しかし、論理的に同値な命題を表現する文は自然言語において必ずしも置き換え可能であるとは限らない。例えば固有名を Kripke(1980) がしたように固定指示子 (rigid designator) と解釈すると、以下のような文はいずれも必然的真理、すなわち全ての可能世界において真となるような命題を表現していることになる⁽²⁾。

- (1) a. 水は H_2O である。
- b. 宵の明星は金星である。

故にこれらを同一の態度動詞の補部に埋め込んだ以下のような文もまた、同一の命題を表現していることになる。

- (2) a. 太郎は、水は H_2O であると信じている／知っている。
- b. 太郎は、宵の明星は金星であると信じている／知っている。

仮にこれらが同一の命題を表現しているのだとすると、一方が真であるときには他方が必ず真となり、また一方が偽であるときには他方が必ず偽となることになる。しかし、これは直観的に言って奇妙な帰結である。事実われわれはなんらの不自然さも無

く「太郎は化学は得意だけど天文学はてんでだめである。実際、彼は水が H_2O であると知っているが、宵の明星が金星だということを知らないんだ」という発話を行うことが出来る⁽³⁾。

このようにして、可能世界説は命題の同一性についてかなりきめの粗い (coarse-grained) 基準を導くことになり、許容しがたい予測を生じさせてしまう。故に、こうした命題の同一性について、われわれはよりきめ細かい (fine-grained) 基準を設ける必要がある。そうした動機から要請されたのが次に見る命題の構造説である。

3. 命題の構造説

3.1 概要

現代における命題の構造説の基本的な想定は、命題はいくつかの構成要素を持ち、それらがなんらかの関係に立つことによって成り立つ、というものである。こうした構造説は可能世界説よりもきめ細かい同一性の基準を与えることが出来る。例えば、先の (1a) と (1b) はそれぞれ以下のような構成要素を持ち、そこにおいて異なっていると考えられる⁽⁴⁾。

- (3) a. =, 水, H_2O
 b. =, 宵の明星, 金星

このように、構造説において、論理的には同値である (1a) と (1b) はそれぞれが異なる構成要素を持つという点において区別されることになり、(2a) と (2b) が異なっているというわれわれの直観を救うことが出来る。

3.2 統一性の問題

こうして構造説は可能世界説よりもきめ細かい同一性の基準を打ち出すことに成功しているが、これは可能世界説が持たなかった問題を孕む。

構造説の最も古く、最も著名な問題点は、命題の統一性 (unity) をいかにして説明するかである。例えば「A は B と違う」という表現は A と相違と B のような構成要素からなると考えられる⁽⁵⁾。しかしこれらはそれ自体では単なる要素のリストでしかなく、いかなる命題でもありえない。これらが命題となるためにはこれら三つの要素の間になんらかの関係が成り立っているものでなければならない。では、そうした関係を R および R' と考えて、「A は B と違う」という表現が A、R、相違、R'、B の五つの構成要素を持つとすれば問題は解決されるか。それでもなおこれらは要素のリストでしかなく、全く同じ問題が生じてしまうのである。以下同様に続く。

こうした命題の統一性問題に対する解決策の一つは、命題を構成要素からなる順序

対と見なすものである。例えば「AはBと違う」を、 $\langle \text{相違}, \langle \mathbf{A}, \mathbf{B} \rangle \rangle$ のような順序対と見なす考え方である。これにより、命題はいくつかの構成要素から成り立ちながらも、単なる要素のリストから区別されることになる。ところで、こうした順序対と同じ役割を果たしうるが、それと区別されるものとして、他にも次のような順序対を考えることが出来る。 $\langle \text{相違}, \langle \mathbf{B}, \mathbf{A} \rangle \rangle$ 、 $\langle \langle \mathbf{A}, \mathbf{B} \rangle, \text{相違} \rangle$ 、 $\langle \mathbf{A}, \langle \text{相違}, \mathbf{B} \rangle \rangle$ などである。これらはいずれも異なる順序対でありながら、同一の構成要素を持っている。では、そのいずれが「AはBと違う」という命題として最も適切なのだろうか。

Jubien(2001)によれば、Benacerraf(1965)で提示されたジレンマがここで生じてしまうという。つまり、いずれの順序対がより適切であるかを定める明確な根拠はなく、結果「AはBと違う」という命題がいずれの順序対に対応するかは恣意的に決定されてしまうという問題である。以上から、命題を順序対と見なす見解は統一性の問題こそ回避出来るものの、新たな問題を生じさせてしまうことが分かる。

3.3 キングの「自然化された」構造説

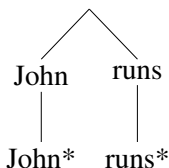
ここでは、前節で見た統一性の問題を回避する一つの提案として、言語の統語論的構造にうったえるキングの議論を見よう。生成文法が自然科学を任じていることに則して、キングはこのアプローチを自然化された (naturalized) 構造説と呼ぶ。

3.3.1 概要

キングによると、各文が表現する命題は、各構成要素が統語論的な構造に立っているという事態 (state of affairs) であるという (cf. King 1996; 2007)。チョムスキー由来の生成文法では、そうした統語論的段階は複数指定されているが、キングの中でも論理形式 (Logical Form: LF) こそが命題に対応するものであると主張する。例えば、以下の (4a) は (4b) のような LF を持つ。

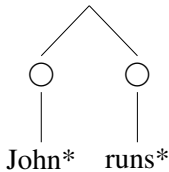
(4) a. John runs.

b.



ここでの ‘*’ は、それが上部にある表現の意味値、それぞれ**ジョン**という人と**走る**という性質であることを示す。(4b) は英語表現「John runs」に対する LF であるが、各々の個別言語においても同様の構造を見出すことが出来る (例えば日本語の「ジョンは走る」など) ため、こうした表現部分を削除すれば次のような言語一般的な構造が得られる⁽⁶⁾。

(5)



キングはここでの白丸と意味値の間の直線が意味論的関係に対応し、二つの白丸を結ぶ折れ線が、二つの意味値を結びつける関係に対応すると考える。そして、こうした(意味値をも含む)構造全体が、「John runs」により表現される命題であると考え。

こうした見解が先の統一性問題を回避出来ることは明らかだろう。命題と単なる要素のリストとを区別する要因は、そうした要素がここで見られる関係に立っているかいないかである。また、LFがいかなるものであるかは現行の統語論に依拠して一意に定まるため、先に見たベナセラフのジレンマはここでは生じない。

3.3.2 問題点

このようにして、キングは統一性問題を回避しうる見解を提示出来ているように思われる。だが、こうしたキングの提案はいくつもの問題を孕むものであり、すでに多くの論者によりそれらが指摘されている。

例えば Hanks(2009) は次の二つの問題点を挙げている。一つは、命題が存在論的に言語に依存してしまうという点である。(4) や (5) でも明らかなように、構成要素は各個別言語の表現と意味論的関係に立つことによって初めてなんらかの構造を持つ。仮に一切の言語が存在せず、白丸部分にいかなる表現も入り込んでこなかったとしたら、構成要素がそうした構造に立つことは出来なくなり、結果そもそも命題が存在しないことになってしまう。つまり、言語があつて初めて命題が存在しうることになるのだ。これは、言語が存在しなければいかなる真理も存在しないという帰結を導くが、これが正しいか否かは必ずしも明確ではないだろう。二点目は、命題の個別化が統語論に完全に依拠するという点である。この点について、ハックスは「Everyone kissed everyone」という事例を用いて指摘している。LFでは量子子をとるスコープの関係が明示化されている。そのため、この文は意味論的には同一の意味を持つが、統語的には区別されるべき二つの LF を持つことになる。LF と命題に直接的な関係を見出すキングの見解では、この文は区別すべき二つの命題を表現していることになってしまう。これは望ましい帰結では無いだろう⁽⁷⁾。

統語論的構造と命題を同一視することについては、その他にも Carston(2002) で提示された意味論的過小決定性の問題が関与してくると思われる。意味論的過小決定性とは、ある文の命題的内容を決定するには意味論のプロセスのみでなく語用論的プ

ロセスが必要である、というものである。例えば以下のような属格構文や代名詞を含む文、また多義的表現を含む文がいかなる命題を表現しているかは、語用論的なプロセスを経て初めて明らかになる⁽⁸⁾。

- (6) a. John's book is on the table.
 b. He is a police officer.
 c. Bob is going to the bank.

仮に LF が命題と同一視されたとすると、これらの文に対する語用論的な処理プロセスが統語論のレベルですでに解消されていなければならないことになる。だが、それはかなり奇妙な帰結である。というのも、そうした語用論的なプロセスを経て導出される命題は当然複数ありうるわけだが、LF のレベルではこれら三つの命題のいずれも単一の構造しか持ちえないからである。むしろ、キングが命題と呼称するものはあくまで Bach(1994) の「命題基 (propositional radical)」のようなものであり、語用論的なプロセスは経ていないと考えることも出来る。しかしその場合、先の (6) のような文が表現する命題は真理値の担い手としての地位を剥奪されてしまうことになる。キングがあくまで真理値の担い手としての命題を特徴付けようとしていたことを鑑みるに、こうした解釈を採ることはおそらく出来ないだろう。故に、(6) のような事例はキングの枠組みにおいて問題となると思われる。

以上に加えて Ripley(2012) は次のような問題点を指摘している。すなわち、直観的に区別すべき場合に、キング流の構造説によって立ったとしても区別出来ないような命題が存在するという問題点である。例えば、次のような文を考えてみよう。

- (7) a. All woodchucks are woodchucks.
 b. All woodchucks are whistle-pigs⁽⁹⁾. (ibid. p.104)

これらはそれぞれ次のような構造的命題を持つと考えられる⁽¹⁰⁾。

- (8) a. [s[DPall*, woodchucks*],[vpare*, woodchucks*]]
 b. [s[DPall*, woodchucks*],[vpare*, whistle-pigs*]]

故に、これらの命題が区別されるのは woodchucks* と whistle-pigs* が区別される時かつそのときに限る。しかし、リプリーによると、これら二つは構造および内包において同一であり、同一の性質を取り上げるものであるという。仮にこの見解が正しければこれら二つの命題は構造説においても区別されないことになる。

しかしこの結論は、次のような二つの文について問題を孕む。

- (9) a. Tama fears that all woodchucks are woodchucks.
 b. Tama fears that all woodchucks are whistle-pigs. (ibid.)

リブリーによると、次のような状況下ではこれら二つの文は異なるものとして解釈される。タマはウッドチャックとホイッスルピッグの両方をよく知っており、それぞれの間に類似性があることも気づいているが、両者が同じ動物であることに確信が持っていない。さらに彼は自分がホイッスルピッグ・アレルギーであることを知っており、ちょうど今ウッドチャックに噛まれたばかりだとする。このとき、(9b)は真であるように思われるが、(9a)はそうではないように思われる。仮にこの見解が正しければ、キング流の構造説は十分にきめ細かい命題を提示出来るものではなくなってしまう⁽¹¹⁾。

以上から、キングによる改訂は構造説の大きな問題点の一つである統一性の問題に対応することが出来るものの、それ以外の点で数多くの問題を孕むことが分かる。注意すべきは命題の可能世界説を採ればこうした問題点をまとめて回避することが出来るという点である。故に、第二節で見た問題点を回避する仕方でも可能世界説を改訂することが出来れば、構造説と比して可能世界説を採用する強い動機が得られると思われる。次節でその可能性をいくつか検討したい。

4. 改訂版可能世界説

本節では、可能世界説の枠組みの中でよりきめ細かな同一性の基準を与える方法について検討したい。その方法は大きく分けて二つある。一つは可能世界に加えて不可能世界 (impossible worlds) を用いる方法であり、もう一つは各々の世界を状況 (situations) へとより細分化する方法である。以下、前者を**不可能世界説**、後者を**状況説**と呼称する。

4.1 不可能世界説

Berto(2012)によれば、不可能世界の定義は大きく分けて四つである。(i) 不可能なことが起こりうる世界、(ii) 論理法則が成り立たない世界、(iii) 古典論理で成り立たないことが全て成り立っている世界、そして(iv) 矛盾が成り立つ世界 ($A \wedge \neg A$ が成り立つ世界) の四つである⁽¹²⁾。基本的に(i)から順により特定の定義となっており、後の番号の定義により不可能世界とされる世界はその前の定義によっても不可能世界とされる。

こうした不可能世界を導入することによって先の(1a)と(1b)を区別することが出来る。例えばBerto(2010)は(i)の定義による不可能世界を用いて命題を特徴付けている。(1a)や(1b)は必然的真理を表現しているため、いかなる可能世界においても真である。しかし、不可能世界を用いた枠組みでは、水が H_2O でない不可能世界や宵の明星が金星でない不可能世界、つまり(1a)と(1b)が表現する命題が偽となる世界が許容

されることになる。(1a)が偽となる世界と(1b)が偽となる世界が一致していなければならない理由は存在しないため、われわれは(1a)が真となり(1b)が偽となるような世界、あるいは逆に(1a)が偽となり(1b)が真となる世界を得ることが出来る。ここで前者を w_1 、後者を w_2 、また可能世界として w のみが存在するとし、 w_1 と w_2 以外に不可能世界が存在しないとすると、(1a)は $\{w, w_1\}$ という命題を、(1b)は $\{w, w_2\}$ という命題をそれぞれ表現することになる。このようにして、不可能世界を導入することで(1a)と(1b)が表現する命題を区別することが出来る。

不可能世界を用いた命題の特徴付けに対するより形式的なアプローチはRipley(2012)において提案されている。彼は基本的には(ii)の定義による不可能世界をモデルに導入することで、クリプキの固定指示子を想定してもフレーゲのパズルが解消出来ることを示している。フレーゲのパズルとは次のような二つの文にかんするものである。

- (10) a. 金星は金星である。
 b. 明けの明星は金星である。

「金星」も「明けの明星」も固有名とする。このとき「金星」も「明けの明星」も同一の対象を指示しているため、これら二つの文は内容的に同一である。にも関わらず、(10a)があまり情報的でないのに対し、(10b)はなんらかの情報を持っているように思われる。こうした違いは以下のように両者を信念文脈に埋め込むことで明らかとなる。

- (11) a. 太郎は金星は金星であると信じている。
 b. 太郎は明けの明星は金星であると信じている。

可能世界意味論はこうした違いを形式的に表現する手段の一つである。つまり、ある世界では「明けの明星」が金星ではなく木星を指示しているなどと想定することで、(10b)を偶然的真理と解釈する方法である。しかし、全ての可能世界において固有名は同一の指示対象を持つという固定指示説を受け入れるとこうした議論は頓挫してしまう。というのも、全ての可能世界において「明けの明星」は金星を指示することになるため、最早(10b)を偶然的真理と見なすことが出来なくなるからだ。

リプリーは不可能世界をモデルに導入し、そこにおいて *schmididentity* ‘ $\approx$ ’ という概念を定義することでこの問題を解決しようとする。*schmididentity* とは、一言で言うと、全ての可能世界において成り立つが、いくつかの不可能世界においては成り立たない同一性のことである。固定指示説の下では固有名は全ての可能世界において同一の対象を指示するとされる。しかし、不可能世界においてそれらが同一の対象を持つか否かについては述べられていない。故に彼のモデルでは、 $v \approx v$ は真であるが、 $l \approx v$ は偽である不可能世界 c が許容されることになり、(10a)と(10b)はそれらを含むか否か

において区別されることになる。

こうして、不可能世界を導入することによって構造説を採ることなくきめ細かな命題の同一性を得ることが出来る。

4.2 状況説

次に状況（状態とも）を用いた命題の特徴付けについて見よう。状況を用いた命題の特徴付けはいくつかあるが、ここでは Fine(2012b) で提案された真理メーカー（truth maker）意味論をベースに考える。

Fine(2012a,b) はルイス由来の反事実的条件法の意味論が、論理的に同値な前件の置き換えについて真理保存的であることを問題視し、それを解決するために可能世界よりもより細かな「状態（state）」を用いた新たな意味論を提案している。こうした世界よりも細かい単位を用いた意味論自体は Barwise and Perry(1983) による状況意味論（situation semantics）においてすでに提案されており、例えば Kratzer(1989, 2012) はそこに「まとめ（lumping）」という概念を導入することで、反事実的条件文にまつわるいくつかの困難を解消することを試みている。ファインの提案する意味論も基本的にはそのラインに沿ったものであり、ただそれらと大きく異なる点は、彼の意味論における「状態」が、命題に対する真理メーカー（truth maker）となっているという点である。バーワイズとペリー、そしてクラッツァーにおいては命題は端的にそれが真となる状況の集合と捉えられていたのに対し、ファインは命題そのものの特徴について特に言及はしていない。本稿ではこうしたファインの方針に則り、命題はそれを真とする状況の集合と考えることにする。ただし、命題の論理的同値性については従来通り可能世界を用いて定義する。つまり、命題 p と q が論理的に同値であるのは、それらを真とする状況を含む世界について等しいときかつそのときに限る⁽¹³⁾。

先にも述べた通り、ファインの提案する意味論は反事実的条件文の前件において、同値な命題同士の置き換えをブロックすべく導入されたものである。この意味論は本稿で問題としている命題的態度内での同値な命題同士の置き換えをもブロック出来ると考えられる。彼はある命題がある状況によって真とされる仕方について、次のように「確証（verification）」と「反証（falsification）」を用いて定義している⁽¹⁴⁾。

- (12) a. 状態 s が $\neg A$ を確証する iff s が A を反証する。
 b. s が $\neg A$ を反証する iff s が A を確証する。

こうしたファイン流の真理メーカー意味論の下では、問題となっていた (1) の二つの文が的確に区別される。つまり、「水は H_2O である」という言明は「水」の指示対象と「 H_2O 」の指示対象を含み、かつそれらが同一であるような状況によって確証され、故

にこの言明が表現する命題はそうした状況を部分として持つ世界において真となる。他方、「宵の明星は金星である」は「宵の明星」の指示対象と「金星」の指示対象を含み、かつそれらが同一であるような状況によって確証され、故にこの言明が表現する命題はそうした状況を部分として持つ世界において真となる。ところで、これら二つの状況は全ての世界に含まれているため、これら二つの文が表現する命題は全ての世界において真である。それ故に論理的には同値となる。ただし、それぞれを真とする状況において異なっているため、これらは同一ではないことになる。

5. おわりに

本稿では命題の正体にかんする二つの枠組みについて考察した。その過程で以下の三点を確認した。すなわち (i) シンプルな可能世界説では論理的に同値な命題が同一視されるが、自然言語において論理的に同値な命題を表現する文が必ずしも置き換え可能でないという問題点があること、(ii) 構造説はよりきめ細かな同一性の基準を与えることでそうした問題を解決することが出来るが、それ以外に数多くの問題点を持つこと、(iii) 可能世界説を状況や不可能世界を用いて改訂することで、構造説を取らずに先の問題が解決されうること、の三点である。

こうした議論において構造説は完全に論駁された訳ではないし、また可能世界説が徹底的に擁護された訳でもない。むしろ示されたのは、構造説であれ可能世界説であれ、なんらかの仕方で命題の同一性にかんする問題に対処することが出来るということである。無論、構造説は可能世界説が持たなかった問題点を多く孕んでおり、それ故に可能世界説の方が有力な立場であると私は考える。しかしそうした問題点は原理的に解決不可能という訳ではなく、仮にそれらが解決された場合、もはや構造説と可能世界説に優劣をつけることは不可能になるように思われる。結局のところ、改訂版可能世界説と構造説との対立は、命題の論理的同値性とは別に同一性の基準をどのように定めるかに争点がある。改訂版可能世界説が可能世界という大枠を微修正することでそうした基準を与えようとするのに対し、構造説は全く別の要素を用いてそれを与えようとしている。おそらくここでの「同一性」とは存在論的な意味でのそれである。注意すべきは、こうした新たな同一性基準の要請が、われわれの言語的な直観に由来している点であろう。つまり、言語的同一性を存在論的同一性にまで反映しようとする際に、本稿で見た論争が生じているのである。しかしながら、果たしてこうした言語的同一性が存在論的同一性に必ずしも反映されている必要があるか否かは、実のところ明らかでない。言語的同一性があくまでわれわれの側に依拠したものであるのに対し、存在論的同一性は（一般的には）われわれとは独立に定められるべきもの

であるからだ。仮に、これら二種の同一性が必ずしも対応関係にある必要がないとすると、本稿で検討した論争はそもそもの意義を失ってしまうかもしれない。おそらく今後議論が必要となるのは、言語的同一性を存在論的同一性に反映させるべきであるというこの前提についてである。仮にこの前提が崩れ去るとしたら、命題の構造説を支持する大きな動機の一つ（すなわちきめ細かな同一性基準の要請）が失われることになる、可能世界説の優位はより強固なものとなると思われる。

註

* g630247@gmail.com

- (1) 内包意味論のより現代的な議論は von Fintel and Heim(2011) に詳しい。
- (2) ここでの必然的真理はいずれもクリプキの言うアポステリオリな必然的真理である。本稿で必然的真理というとき、特に断りが無い限りはアポステリオリな必然的真理を意味する。アプリオリな必然的真理を扱わない理由については註(3)を参照のこと。
- (3) 多くの論者がアプリオリな必然的真理について同様の議論を行っているが、私にはそうした議論は少々奇妙に思われる。例えば、アプリオリな必然的真理として「既婚者は結婚している」、「独身者は結婚していない」などが挙げられるが、これらの文は「既婚者」や「独身者」、あるいは「結婚」や否定辞の定義を正しく理解する日本語話者にとってはトートロジーである。故に、それらを「信じる」などの態度動詞の補部に埋め込んだ「太郎は既婚者は結婚していると信じている」や「太郎は独身者は結婚していないと信じている」は常に真である。こうした見解に対して、「太郎は既婚者は結婚していると信じているが、独身者は結婚していないと信じていない」という表現が可能ではないか、という反論があり得る。しかし、こうした信念文はむしろ太郎のメタ言語的な信念、つまり「太郎は『既婚者』という表現が結婚している人を意味すると信じているが、『独身者』という表現は結婚していない人を意味していないと信じている」という信念を表現しているのであって、先のような表現と同列に扱うべきではないと私は考える。無論この点についてはより緻密な議論が必要であるが、それは本稿の範囲を逸脱しているため、ここではアポステリオリな必然的真理のみを扱うことでこの点を回避することにする。
- (4) ここではコピュラは同一性を意味するものとして解釈している。
- (5) ここでの例は Russell(1905) に拠る。
- (6) 個々の‘○’は各個別言語において当該の意味値を持つ表現に対応。
- (7) 後者の過剰個別化の問題については Ciecieski(2011) が、全ての真理の集合は存在しないという Grim(1984) の議論を応用してより一般的に議論している。
- (8) 具体的には、(6a)であればジョンと本との関係、(6b)であれば‘he’の指示対象、(6c)であれば‘bank’が「銀行」を意味するのか「堤防」を意味するのかといった点について語用論が関与してくる。
- (9) ウッドチャック (woodchuck) はリス科の動物で、別名をホイッスルピッグ (whistle-pig) と言う。cf. <http://en.wikipedia.org/wiki/Groundhog>
- (10) ここではリプリーの表記をキング流に改めている。
- (11) しかしリプリーの反論は、Moltmann(2003) が指摘する代替問題 (substitution problem) をまともに被るという点で問題である。一般に that p がなんらかの命題を表現しているとする、the proposition that p もまた同じ命題を表現していると考えられる。しかし「A fears that p」と比べて、「A fears the proposition that p」は適当な言明であるとは思われない。このように、いくつかの態度動詞の補部を「the proposition that p」という目的語に置き換えることで直観的な奇妙さ（あるいは非文法性）が生じることがしばしばある。この問題の解決策の一つ

は、動詞ごとに that 節が命題を指示したり事実を指示したりすると想定することであるが、仮にこの解決策が正しければ、(9) の that 節は命題を指示していないことになり、リプリーの反論は適切なものではないことになる。

(12) (i) における「不可能なこと」には論理的に不可能なことのみになく、諸自然科学（物理学や生物学など）において不可能なことまでもが含まれる。

(13) 命題の同値性を世界について論じるという提案はクラッツァーのものである。故にここでの改定案は、クラッツァーとファインのアイデアを融合させたものとも言えるだろう。

(14) ファインは他の真理関数についても確証と反証を用いた真理条件を与えている。基本的に本稿では原子命題とその否定についてのみ扱うが、ここでの議論は他の真理関数についても拡張可能である。

文献

- Bach, K. (1994). 'Conversational Implicature,' *Mind and Language*, 9, 2, 124–162.
- Barwise, J. & Perry, J. (1983). *Situations and Attitudes*, Cambridge: The MIT Press.
- Benacerraf, P. (1965). 'What numbers could not be,' *Philosophical Review*, 74, 47–73.
- Berto, F. (2010). 'Impossible Worlds and Propositions: against the Parity Thesis,' *The Philosophical Quarterly*, 60, 240, 471–486.
- (2012). 'Impossible Worlds,' in Zalta, E. N. ed. *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, winter 2012 edition. <http://plato.stanford.edu/archives/win2012/entries/impossible-worlds/>.
- Carston, R. (2002). *Thoughts and Utterances*, Oxford: Basil Blackwell.
- Ciecielski, T. (2011). 'A Problem with Structured Proposition,' in Stalmaszczyk, P. ed. *Philosophical and Formal Approaches to Linguistic Analysis*: Ontos-Verlag, 81–87.
- Fine, K. (2012a). 'A difficulty for the possible worlds analysis of counterfactuals,' *Synthese*, 189, 29–57.
- (2012b). 'Counterfactuals without Possible Worlds,' *Journal of Philosophy*, 109, 3, 221–246.
- von Fintel, K. & Heim, I. (2011). 'Intensional Semantics.' <http://mit.edu/fintel/fintel-heim-intensional.pdf>.
- Grim, P. (1984). 'There is no set of all truth,' *Analysis*, 44, 4, 206–208.
- Hanks, P. (2009). 'Recent Work on Propositions,' *Philosophy Compass*, 4, 1–18.
- Jubien, M. (2001). 'Propositions and the Objects of Thought,' *Philosophical Studies*, 107, 47–62.
- King, J. (1996). 'Structured Propositions and Sentence Structure,' *Journal of Philosophical Logic*, 25, 5, 495–521.
- (2007). *The Nature and Structure of Content*, Oxford University Press: New York.
- Kratzer, A. (1989). 'An Investigation of Lumps of Thought,' *Linguistics and Philosophy*, 12, 5, 607–653.
- Kripke, S. (1980). *Naming and Necessity*, Cambridge: Harvard University Press.
- Lewis, D. (1973). *Counterfactuals*, Oxford: Blackwell.
- Moltmann, F. (2003). 'Propositional Attitudes without Propositions,' *Synthese*, 135, 1, 77–118.
- Montague, R. (1973). 'The Proper Treatment of Quantification in Ordinary English,' in Hintikka, J., Moravcsik, J., & Suppes, P. eds. *Approaches to Natural Language*, Dordrecht: Reidel, 221–242.
- Ripley, D. (2012). 'Structures and circumstances: two ways to fine-grain propositions,' *Synthese*, 189, 97–118.
- Russell, B. (1905). 'On Denoting,' *Mind*, 14, 56, 479–493.
- Stalnaker, R. (1984). *Inquiry*, Cambridge: The MIT Press.

〔京都大学大学院博士課程・哲学／日本学術振興会特別研究員〕